神を喰らう者～夜明けの開花～

白レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神を喰らう者～夜明けの開花～

【Ｎコード】
Ｎ９９６６Ｘ

【作者名】
白レン

【あらすじ】
神を喰らう者たちの戦いは今日も続いていた……そんな中、激戦区と呼ばれる極東支部に初の新型神機使いが誕生した。

一喰：贖罪の街（前書き）

基本原作に沿った流れで行くつもりですが、日常生活の描写やオリジナルの展開もしていく予定です。だいぶ先の話になりますし、小説書くのは初めてなので優しい目で見て頂ければ幸いです。

一喰：贖罪の街

えぐられた様な大地、風穴を開けられたビル群。かつて多くの人々が生活していたとはにわかにも信じ難い。そしてその世界を徘徊する異形達……。

鬼のような顔と模様のある尻尾、「オウガテイル」と呼ばれるその化物は今、集団で息絶えた獲物を捕喰していた。

そこへやってきたのはオウガテイルよりも遥かに大きい、獅子のような姿をした化物「ヴァジュラ」だ。獲物を見つけたヴァジュラは一気に距離を詰めて、その命をあっさり奪う。

オウガテイルの群れを貪るヴァジュラは食事に夢中で、近くの廃ビルに潜んでいた気配に気付かない。

そこには巨大な武器を担いだ人間が三人いた。ヴァジュラの様子を窺い、その剣で切り掛かるタイミングを狙っている。

そしてわずか数分でその戦いに決着がついた。

力尽きたヴァジュラに三人の内の一人が近づくと、武器を上へ持ち上げた。

武器のパーツがゴソゴソ動いたかと思ったら、中から黒い大きな口が出てきた。それを向けられたヴァジュラの肉体はあっという間に食いちぎられた。

口を武器に収めた男が口を開いた

「おっとレアモノだな」

捕喰を通して武器から手に入った素材を見て雨宮リンドウが呟く。

「戦果は上々ってやつね」

そう口にするのは橘サクヤ。

リンドウは頭を掻いて「またサカキのオッサンがはしゃぎそうだ」とぼやいた。

「さ、帰りましょ。お腹すいちゃった」

サクヤのその一言で一行はその場から引き上げる。

「今日の配給なんだったかしら？」

「うん？確かこの前の食糧会議で何か言ってたな……あぁそうだ！新しい品種のトウモロコシだ」

「え～またあのでかいトウモロコシ～？あれ食べづらいんだよね～……」

「このご時世だ、食えるだけでもありがたいと思えよ～」

と、リンドウはたしなめる。

「ねえソーマ、何かと交換しない？」

「……断る」

ソーマと呼ばれた青年はたった一言でサクヤの申し出を拒否した。

「おーいお前ら！おいてくぞ」

リンドウの呼び声で再び二人は歩きだし、数少ない安息の地「アナグラ」へと飛ぶヘリの待機地点へ向かった。

一喰：贖罪の街（後書き）

主人公は次の話に出て来ます。名前は「神霧ハイド」です。同じですハイ。作者名でいい名前が思い浮かばなくって・・・。

「神霧」は神斬りクレイモアから、「ハイド」はリスペクトしている人から拝借しました。

作中では別の理由になりますが・・・。

ちなみにこの名前はゲームのメインデータです。

二喰：適合試験（前書き）

ミス修正しました。ただでさえ少ないページ数が更に減りました。

二喰：適合試験

帰投中のヘリの中でソーマはイヤホンをつけて音楽を聴き、リンドウとサクヤは他愛のない会話をしていた。

やがてヘリは人類最後の砦「フェンリル」に到着した。ミッションの報告を行うためオペレーターのもとへ向かっている途中、ふとサクヤが軽いグチをこぼした。

「それにしても、やっぱり人手が足りないのよね～」

生きるか死ぬかの戦いを繰り広げる彼らは、常に人員不足に悩まされている。

「早く新しい人が来てくれるとありがたいんだけど……」

「そういうことならとっておきの情報があるぞ」

サクヤの言葉にリンドウが反応する。

「え？まさか新人が入ってくるの！？」

「ああ二人な」

リンドウはサクヤに応える。

「一人は旧型銃身神機、もう一人はなんと新型神機の適合試験を受けるらしい」

「新型神機！うちの支部では初めてね～」

サクヤは「素直な子だといいわね～」と顔を綻ばせて言った。が、一歩後ろを歩いていたソーマは正反対の事を考えていた。

（チッ……面倒が増えそうだ）

「ようこそ…人類最後の砦フェンリルへ…今から対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適性試験を始める」

演説で多くの人々を魅了するであろう美声が円形の広い部屋に響き渡る。壁にはあちこちに傷や弾痕などがついている。

その部屋の中央には台座が置かれていた。

普通ではなかなか目にしない光景に少々気圧されている青年を見て、その声の主「ヨハネス・フォン・シックザール」は再び声をかける。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい…心の準備ができたら中央のケースの前に立ってくれ」

「…はい」

青年はそう答えると部屋の中央へゆっくりと向かっていく。

ケースは上下半分に分かれており、それぞれに半円型の赤い物体がはめられていた。その物体がある場所は、あいだに置かれた剣の柄の部分……

……なんだかものすごく嫌な予感がしながらも柄手を伸ばす。

すると案の定、上の蓋がギロチンのように落ちてきて腕をバクンと挟まれた。

「ぐっ…うおおおぉぁぁぁぁっっっ！！！」

グチャグチャと嫌な音をたて、手首に堪えがたい激痛が走る。

そしてケースの上蓋が開いくと赤い腕輪をつけた青年の腕と、その手に柄をしっかりと握られた剣が出てきた。

青年はその剣を持ち上げ、まじまじと見つめていた。と、その時、柄のすぐ上にある黄色い球状の物体から黒い触手が伸びてきて腕輪に刺さった。

「おめでとう。君がこの支部初の新型ゴッドイーターだ」

シックザールの声が響く。どうやら終わったようだ。青年は緊張が解けて安堵の表情になる。

「次に、適性試験後のメディカルチェックが予定されている。後ろの扉から出て、指定された場所まで行って待機していてくれ。尚、『気分が悪い』など症状がでた場合は即座に申し上げるように。期待しているよ、神霧ハイド君。」

「はいっ！」

『神霧ハイド』と呼ばれた青年は、これから始まる激しい戦いに身を引き締め、自分の上司にしっかりと返事をして部屋を出ていった。

二喰：適合試験（後書き）

すいません。この話で酷いミスを犯しました。修正を施したので、今後は気をつけて書きます。

三喰：挨拶回り（前書き）

サブキャラ登場回です。大分字を打ったつもりだったんですが以外と量が少なくて「まだまだだな」と思いました。

三喰：挨拶回り

待機場所に着いたハイドは、自分と同い年くらいの男の子がソファに座っていることに気づいた。

（あの服…確か外部居住区で人気のブランドだったっけ…同い年…いや、いっこ下くらいかな？）

そんな思考を巡らしながら自分もソファに腰掛けると、その男の子が話し掛けてきた。

「ねぇ、ガム食べる？」

ところが「あ、うん」と言おうとする前に

「あ、切れてた。今食べてるので最後だったみたい。ゴメンゴメン」

「え？ああ、そう…」

ハイドはそう答えると少しの沈黙が訪れる。

「あんたも適合者なの？」

「うん、まあね」

「俺と同じか少し年上っぽいけど…でもまあ、一瞬とはいえ俺の方が先輩ってことで！」

無邪気な顔でそんなことを言うその少年に、自然とハイドも笑顔に

なる。

「俺、藤木コウタっていうんだ。よろしくぅ！」

「俺は神霧ハイド。よろしくな、コウタ」

互いの自己紹介が終わったところでハイヒールの鳴る音が近づいてきた。

音のする方へ顔を向けると、見る者を圧倒するような真っ白い服に身を包んだ女性がこちらへやってくる。多分上司…それも厳しいタイプのだと悟ったハイドはソファから立ち上がる。やがて自分達の前で足を止めるとまだ座ったままのコウタに顔を向けた。

「立て」

「へ？」

「立てと言っている。立たんか！」

そう言われてコウタは素早く立ち上がり姿勢を正す。

「時間がないので手短に話す。私の名は『雨宮ツバキ』。お前達の教練担当者だ。今後の予定はメディカルチェックを受けた後、基礎体力の強化、戦術理論の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらう。今までは守られる側だったかも知れんが、これからは守る側だ。つまらないことで死にたくなければ私の命令にはすべてＹＥＳで答えろ。いいな？」

「はい！」

「分かったら返事をしろ！」

「はいっ！！」

またもやコウタが怒られ、若干恐怖の入り混じった返事をする。

（俺たちこの先大丈夫かな？）

とハイドは思う。

「まずは神霧ハイド、お前からだ。榊博士の研究室に一五〇〇までに集まるように。それまでこの支部を見回っておけ。今日からお前達が世話になる、通称『アナグラ』だ。挨拶の一つでもしておくように」

「はい！」

するとツバキの後ろから声がした。

「あ、ツバキさん！ちょうどよかった。ミッションの報告書の件で話が…」

そう言ったのは赤いジャケットを着た二十歳くらいの男性だった。隣に青いジャケットを着た男性と、緑のワンピースを着た薄桃色の髪の女の子もいる。

「ああ、お前達。ちょうどよかった。今日から極東支部に配属になった新人を二人紹介する。」

「新人ですか！じゃあ名乗るときは自分から。俺は第二部隊、防衛班隊長の大森タツミだ。よろしくな！」

爽やかかつ快活そうな声でタツミは自己紹介する。

「俺はブレンダン・バーデル。同じく第二部隊に所属している。頼りにしてるぞ」

と、ブレンダンは挨拶する。低くてしっかりしている声は逆にいざという時本当に頼りになりそうなイメージを与える。

「あの、私台場カノンっていいますっ。お菓子作ったりするのが好きなので、二人にも作ってあげますね。」

カノンは可愛らしい挨拶で二人に（この時だけは）いい印象を与えた。

「本日付けで入隊となりました、神霧ハイドです。皆さんに少しでも早く追いつくために一生懸命頑張ります」

「おう！頼むぜ。新戦力はいつでも大歓迎だ」

ハイドの挨拶にタツミが答える。本当に気さくな人だとハイドとコウタは思った。

「俺、藤木コウタ！よろしくお願いしまっす！」

「フ、明るく元気だな。今時珍しい」

ブレンダンは穏やかな表情でコウタを見る。

確かに今、人類は窮地に立たされている。死ぬ可能性が高いこの世界で、これだけ明るい人間は逆に珍しいだろう。

「まあとにかく死ぬなよ？絶対生き残るんだ！いいな？」

『ハイ！』

二人が返事をしたのを見てツバキが口を開く。

「よし。ところで書類に関する話とはなんだ？」

「ああ、そうでした！今日のアラガミとの戦闘で破損した外壁のことなんですけど……」

なんだか難しい話になってきたのでハイドとコウタはその場を離れた。

「はぁ～…怖かった～…」

ツバキから離れた場所でうなだれるコウタ。

「大丈夫か？」

「まあね。でもよかったよ～…厳しい人ばかりってわけじゃないみたいだし」

「ああ、タツミさん達のことか。確かにね」

「でもさ～…やっぱり後輩いびりとかする先輩もいると思うんだよ

な～」

「あれ？お前ら見ない顔だな？」

『え？』

二人が振り返ると、帽子を被ってパーカを着た少年と首に直接ネクタイを巻いた金髪の青年、そして胸元を大胆に露出させ、眼帯を装着した銀髪の女性の三人が立っていた。

「お前ら新人か？」

「ええ、そうですが」

金髪の青年が質問したのでハイドが答える。

「本日付けで入隊した神霧ハイドです」

「俺、藤木コウタ！よろしく！」

二人が挨拶したところでコウタの挨拶を聞いた帽子の少年が一歩前に出てコウタと向き合う。

「お前先輩に対する口の聞き方がなってねぇな。」

「え？」

「先輩に対して今の口の聞き方が馴れ馴れし過ぎるっつってんだよ」

「やめなさいシュン。あなた本当は後輩ができて嬉しいんでしょう

？素直じゃないわね」

横から入ったのは眼帯の女性だった。シュンと呼ばれた少年は苛立たしげに女性を睨む。

「うるせぇっ！…ったく、まあいいや。俺は第三部隊所属の小川シュンだ。ま、せいぜい死なねーように気をつけな！」

そう言ってシュンは行ってしまった。

「まったく、生意気なのはお前も同じだろっての…。同じく第三部隊所属のカレル・シュナイダーだ。よろしくな。言っておくが、俺より活躍するのはやめろよ。配給の低い任務が回ってくるからな」

そう言い残しカレルも行ってしまった。

「な…なんなんだあの二人…」

二人…特にコウタの方は唖然とした表情で固まっていた。

「気にしないで。あの二人はいつものことよ…。私はジーナ・ディキンソンよ。ジーナってよんでちょうだい」

「は、ハイ」

大人の女性らしい色っぽい声にコウタは思わず緊張してしまう。

「あ、あの…ジーナさん…」

「何？」

「失礼なこと聞きますけど…あの…その…どうしてそんなに胸を開いてるんですか…？」

「ああ、これね…私なりの価値観ってやつかしら…戦っているときはこの世に私とアラガミだけ…私はアラガミと命で向き合っているだけなのよ…その間を隔てるものは私には必要ない…」

ジーナの独特の感性に二人は呆気に取られる。

「あ…二人共行っちゃったからミッションの報告私がしなくちゃいけないのね…悪いけどもう行かなくちゃ。じゃああなたたちも頑張ってね」

そう言い残しジーナは立ち去って行く。

「なんていうか…すごいね」

ジーナの後ろ姿を見ながらハイドは思わず口にした。

「…ホントだよな」

コウタも同感であった。

「…ハイド、そろそろ時間じゃないか？」

「ああ、そうだな。じゃあ行ってくるよ」

（一五〇〇までに集合だったな…少し急いだ方がいいか？）

時間を確認したハイドは足早に、榊博士の研究室へと向かった。

三喰：挨拶回り（後書き）

……やっぱりややこしいな作者名と主人公名……

さて、サブキャラはかつて主人公のエディットで作れてしまいましたがバーストからは個性が出ました。

その中でもジーナ姉さんは飛び抜けて個性的でした。

四喰：検査と責務と訓練（前書き）

修正第二弾。指摘されたら気になるタイプの人間です。

四喰：検査と責務と訓練

ハイドは榊博士の研究室があるという「ラボラトリ」の区画へエレベーターで向かっていた。研究室へ向かう途中、すれ違う他のゴッドイーター達はみな物珍しそうな目で見てきてむず痒い思いをした。

やがてハイドは目的の場所へと到着した。

中に入るとモニタやキーボードなど機械に囲まれてせわしなく指を走らせる狐目の男、そしてその隣に白いロングコートを着た、端整な顔立ちの男がいた。

「ふむ…予想より７２６秒も早い…よく来たね、神霧ハイド君。私は『ペイラー・榊』。アラガミ技術開発の統括責任者だ」

榊はハイドに名乗ると、休めていた指を再び走らせる。

「さてと…見ての通り、まだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

榊はそう言って隣の男を見る。

「榊博士…そろそろ、公私のけじめを覚えていただきたい。先程の適合テストではご苦労だった…私の名は『ヨハネス・フォン・シックザール』。この地域一帯のフェンリル支部を統括している。さて、我々フェンリルの目標を改めて説明しよう。君に課せられた責務はこの地域周辺のアラガミの撃退とその素材を持ち帰ることだ。そしてそれらは全てここ…前線基地の維持と、来るべきエイジス計画の資源として使われる。」

「この数値はっ…！」

突然榊の声が横から割ってきて説明が中断される。ハイドは驚いて顔を榊に一瞬向けるが、すぐに姿勢を正しシックザールと向き合う。

「エイジス計画…外部居住区のメディアでもよく取り上げられているあの…」

「そう…人類の楽園を作るという理念のもとに進められている計画だ。正確には、旧日本海付近に外部居住区のものとは比べものにならないほど強固な、対アラガミ装甲を展開した人工の島を作り、そこに人々を住まわせるというものだ。」

「ほほーー！！」

また榊の声がが割って入るがヨハンは無視する。

「この計画が成就すれば…少なくとも人類は当面の間、絶滅の危機を遠ざけることが出来るはずだ。」

「すごいっ！！！これが新型かぁ～！！」

「ペイラー…説明の邪魔だ。」

ついに堪えられなくなりヨハンが榊に注意する。

「ああ、ゴメンゴメン！ちょっと予想以上の数値に舞い上がっちゃったんだよ～」

榊の様子にため息を漏らすシックザール。

「ともあれ、人類のためだ。尽力してくれ。では、私はこれで失礼する。ペイラーは検査が終わったら、私にデータを送っておいてくれ」

シックザールはそう言って、部屋を出て行った。

「よし！準備は完了だ。そこのベッドに横になってくれ。少し眠くなるけど心配はいらない。次に目が覚めたときは自分の部屋だ。戦士のつかの間の休息というやつだね。予定では１０８００秒だ。ゆっくりおやすみ」

何されるんだろうと若干…いやかなり不安になりながらハイドは横になり検査が始まった。

眠ったハイドを部屋へ送った後、榊は自分専用のターミナルにアクセスし、ハイドの計測データを見ていた。

（ふむ…ただでさえ適合しにくい新型神機に選ばれ、なおかつソーマ並の適合率の高さ…間違いないなく即戦力となる逸材だね…）

現在世界に新型神機使いは数えるほどしかいない。その中でもハイドの潜在能力の高さは群を抜いていた。

「指導方法や成長次第では世界最強のゴッドイーターになるかもしれないな…」

そう呟いた彼は比較的まずいコーヒーを口にした。

やがてハイドは新人区画の一室で目が覚めた。ぼやけている視界が鮮明になってくると、自分がいる部屋を見回す。

「…ここが俺の部屋か…」

まだ新しいのか小綺麗な部屋だった。外部居住区にいた頃とはえらい違いである。

「そういえば眠ってる間は検査があったんだっけ？」

そこでハイドは自分がいつの間にか寝巻きに着替えてることに気づく。

（あれ…？いつ着替えたんだ…？まさか榊博士が？いやいやまさかそんな～…）

と思いつつも、言い知れぬ不安が積もる…。

（……っ！！）

突然ガバッと上着を脱いで上半身裸になるハイド。両手で身体中をぺたぺた触り、切られたり縫われたりされていないか確認する。

「…ふぅ～…」

なんともないことがわかり安堵するハイド。おもむろにベッドから起きて伸びをしたあと、クローゼットに向かって歩く。

中にはやはり昨日着ていたフェンリル支給の隊員服が掛けられていた。（それも同じデザイン、同じ色が何着も）

他の服は駄目なのか？と疑問に思いつつ服を着替える。まず右手を通して…

「…んっ？…あれ？」

やっぱりというか…右手についている大きくて無骨な腕輪が引っ掛かっていた。

「ふん！この…！ちょ…おまっ…！往生際がっ…悪いぞ！！」

ひたすら腕輪と格闘するハイド。１０分ほど時間をかけてようやく袖が通った。

「っだぁ～…着づら！！」

頑張りすぎて腕が痛い。

とりあえず服を着替えたハイドは部屋の外に出た。すると正面のエレベーターの近くにシュンが立っていた。隣にコウタもいる。

「おう、やっと目覚めたか。」

シュンは待ちくたびれたぞ、といった口調でハイドに言う。

「小川さん？どうしたんですか？」

「俺達を迎えに来てくれたらしいよ。今日から訓練が始まるからさ。

」

ハイドの問いにコウタが答える。

「おら、さっさと行くぞ！早くしないと俺がツバキさんにどやされるんだからな！」

シュンの呼びかけで一行はエレベーターに乗りエントランスへと向かった。

エントランスに到着すると、階段を降りた先を指差してシュンが言った。

「あそこにオペレーターがいるんだ。その人に話し掛けて、『訓練ミッション』を受注してこい。受注が完了したらあそこの出撃ゲートから出て、案内表示に従って行けば訓練場に行けるぜ」

「わかりました。」

ハイドがにこやかにそう言うとシュンは「フン」とそっぽむいて言った。

「じゃあ俺は部隊の方に戻るからな。訓練でいきなり死ぬなよ～」

ひらひらと手を振ってシュンはゴッドイーター用ターミナルへと向かっていった。

ハイドとコウタは階段を降りて行くと…

「やあヒバリちゃ～ん、今日もかわいいねぇ～」

「もう、タツミさん！他の方々の邪魔になるのでそういうことはやめてください！」

……いきなりナンパ現場に遭遇……

「どうする？ハイド」

コウタはタツミの新たな一面を見せられて少し引いている。

二人はなんとかオペレーターらしき人に話し掛けようと試みるが、タツミが一瞬たりとも間を空けずに話し掛けるのでなかなかタイミングが掴めない。

（タツミさんには悪いけどこっちも急がないといけないしな）

「あの！すいません！」

ハイドの大きな声でタツミとヒバリが振り返った。

「おう、ハイドにコウタじゃねえか」

「…あぁ！新人さんの方々ですね！はじめまして、オペレーターの『竹田ヒバリ』といいます。

ミッションの受注や報酬の受け渡しなどは私が行いますので、これから関わることも多くなると思いますが、よろしくお願いします。それでどういったご用件でしょうか？」

ヒバリの質問にコウタが答える。

「えっと…訓練ミッションを受注したいんだけど…」

「了解しました。ツバキさんが用意されたミッションが届いてます。準備ができましたら出撃ゲートから指示に従って第一訓練場へ移動してください。」

そう言ってヒバリは、同性でも惚れ惚れするような笑顔を二人に向ける。

「わかりました。よし…行こうかコウタ」

「おう！」

そして二人は来た道を戻って出撃ゲートへ向かう。その途中「でさ～ヒバリちゃ～ん…」とか「ああっ！いつの間にかこんなに並んでる！！」という声が聞こえたが…。

ゲートから出たハイドとコウタは、壁に設置されてるインフォメーションに従って進んでいく。

「最初は基礎体力の強化とか言ってたけど、なにやらされるんだろう？ハイド、なんか聞いてる？」

コウタはハイドに聞いてみる。

「いや、何も聞かされてないけど…」

「そっかぁ…まあなんとかなるっしょ！」

コウタはニカッとして言った。それを見てハイドは「ふふっ」、と笑った。コウタの笑顔が怪訝な顔になった。

「なーに笑ってるんだよ～…」

「いや、ゴメンゴメン。コウタは前向きだなって思ってさ」

とハイドは言った。良く言えば前向き、悪く言えば楽観的。戦場では危うい要素かもしれない。でも今はエイジス計画というわずかな希望しかないこの世界で、コウタの前向きな言動は非常にありがたい。戦いの前の緊張を程よくほぐしてくれそうだ。

「後ろ振り返ったって仕方ないだろ?それに過去にこだわってたら、いつまでたっても前には進めないしさ…だったら俺は常に前向いていこうって決めてるんだ!」

そう言ってまた笑顔になるコウタ。

「さ～て…今日の訓練とやらを片付けるか!」

「ああ、そうだな!」

たどり着いた訓練場の入口の前で気合いを入れ直す二人。シュッと自動ドアが開き二人は中に入った。

(広い丸い部屋…適合試験を受けた部屋に似ているな…ひょっとしていくつか同じ部屋があるのか?)

そんなこと思いながら部屋な中央に進むハイドとコウタ。そして二人の向かう先にはツバキがファイルボードを持って待っていた。

「ふむ…時間通りだな、よくきたな二人共」

ツバキが二人を見て言う。

「では早速トレーニングを開始するが、その前にまず簡単な説明をしよう。お前達二人やその他の者達、私のような現役を引退したゴッドイーターまで、皆腕輪からオラクル細胞を投与している。オラクル細胞についての詳しい説明は、近いうちに榊博士が講義を行うので、そこで学ぶように。そしてそのオラクル細胞は、人体への投与に成功すれば、身体能力を爆発的に引き上げてくれる。筋肉の瞬発力や持続力、反射神経や動態視力、聴力など身体中のほぼ全ての器官が強化される。よってそれに比例したトレーニングメニューとなるのでそのつもりで。」

『は…はあ…』

なんだかよくわかってなさそうな二人を無視してツバキは話を続ける。

「ではまず腕立て伏せからだ。回数は１５００回。一秒に一回のペースでこなしてくれ」

……え……？今この人なんて言った…？１…５００？桁がひとつ違うような気がする……

「あ…あの…ツバキさん…」

コウタが控えめに手を挙げる。

「なんだ？」

「なんか…桁がひとつ違うような気が…」

「そうか…お前は１５０００回だな…訓練熱心な奴だ」

「１５００回！やらせていただきまっす！」

「フッ、冗談だ。心配するな。たとえ仮にまったく腕立て伏せができない者でも、オラクル細胞を投与すれば７００くらいは出来るようになる」

さらっととんでもないことを言ったツバキ。

「さあ、さっさと終わらせないと次のメニューがいつまでたっても消化されんぞ！」

こうして鬼教官ツバキの『楽しい新人クッキング』がスタートした。

四喰：検査と責務と訓練（後書き）

小説を見せてくれとせがまれて見せたら日本語の間違いを指摘されました。気づいてくれてありがとうございます。自分で書いてると分からないものですね…。

五喰：睡眠と食事を貪る者（前書き）

トレーニングを受けて疲労困憊になって食事してシャワー浴びて寝るという話です。……部活かっ！！

五喰：睡眠と食事を貪る者

「……コウタ……生きてるか……？」

「……へっ…へへっ……全然…大丈夫だぁ…」

（全然大丈夫じゃないな……）

ツバキ教官のもとでひたすらトレーニングに励んでいた二人はもはや立ち上がる気力すらなかった。

何せ腕立て伏せのあと

・背を預ける場所がない状態で腹筋
・腹がつかない状態で重りを背負っての背筋
・高さ３ｍ７０ｃｍに設置されたマーカーにタッチしなければならないジャンピングスクワット
・剛速で飛んでくるボールをフェイスガード無しで避ける

…等のメニューを消化していたのである。シュンが「訓練で死ぬなよ」と言っていた意味がよくわかった二人である。

「しかし驚いたな…全てこなしてしまうとは…」

『……へ？』

「大概はトレーニングのあまりの密度の濃さに途中でリタイアしてしまうのだが…全てのメニューを消化した新人はいつ以来だったか…。まあいい。二人とも今日は本当によく頑張った。ゆっくり休め。

」

「……てことは無理して全部やらなくってもよかったってこと～!?」

コウタが落胆の悲鳴をあげる。

ハイドも大声をあげて不満を漏らしたかったが余計疲れるのでやめた。

そもそも彼ら二人が何故メニューを全てこなしてしまったのか?

それはハイドがペースを乱さずに黙々とメニューをこなしていくのを見ていたコウタが、「負けられない!」と張り合ったせいなのである。そしてハイドもそんなコウタの気配を肌で感じ取り、「そうはいくか!」と同じく張り合ってしまったのである。

といういきさつで二人は己の筋肉と体力の限界に挑んだのであった。

「…戻ろうかコウタ?なんなら手を貸すぞ?」

ハイドは気力を振り絞って立ち上がり、床でへばっているコウタに手を差し延べる。

「ふ、ナメるなよ…このコウタ様の底力をぉ!」

と言って腕に力を込めるが……立てない……。

「…ハイド…立ち上がるのだけ手伝って…」

言われてハイドはコウタの手を引き、立ち上がらせる。コウタはなんとか自力で立っているが、生まれたての動物のように膝がガクガクしている。

やがてバランスを崩し尻もちをついた。

「悪ぃ……手ぇ借りるわ……」

ハイドはコウタの右腕を自分の肩にまわして、歩きだす。

「帰れそうか？」

ツバキは自分もフラフラなはずなのに他者に手を貸すハイドに言った。

「……なんとか頑張ります。失礼します」

そう言ってハイドとコウタは訓練場を出た。

なんとか根性でエントランスに戻った二人はヒバリのもとへ向かった。

「あ、ハイドさんにコウタさん……大丈夫ですか？」

「まあ……なんとか……」

ボロ雑巾のような二人を見てヒバリは心配した。そしてそれにハイドが答える。ハイドは今もコウタに手を貸しているので、事情を知らぬ通行人は何があったんだ？という目で見ていた。

「とにかく、ミッションは完了しました」

ハイドはとりあえずミッション完遂報告をする。

「では、こちらの書類にミッションの参加メンバーと任務地、ミッション中に行ったこと、それからミッション完了後の自分を含めた部隊員の状態を記入して下さい。『環境及び建造物の破損状況』の項目は、今回の任務には該当しないので記入の必要はありません。何かわからないことはありますか？」

と、ヒバリは書類をカウンターの下から取り出して説明をする。

「いえ、大丈夫です」

力なくハイドはそう言うと書類を受け取り、コウタに持たせた。自分はコウタを支えることに両手を使ってしまっているからである。

「原則として、ミッションの報告書の提出は、『そのミッションを行った時刻から２４時間以内』となってます」

「わかりました」

（２４時間か…今すぐに書いてゆっくり休まないと身体がもたないな…）

そのとき左肩がズシッと重くなった。そして自分の足元に、さっき受け取った書類が落ちている。コウタの方を見ると、彼はすーすーと寝息を立てていた。

（眠っちゃったのか…）

ハイドは書類を拾うと口にくわえた。そしてコウタを手近なソファに寝かせる。テーブルの上に書類を置くと改めてヒバリの方へ戻った。

「コウタさん、今日は頑張ったんですね。立ってても眠っちゃうなんて…」

「そうですね…まったく同じメニューこなしてた僕が言うのもなんですけど」

そう言って二人はコウタの方を見る。横向きだった体勢が仰向きになり、安らかな寝息はいびきに変わっていた。

「熟睡してますね」

「クスクス…それではこちらが今回の任務の報酬です。」

ヒバリは二つの袋と１０と刻まれたｆｃ『フェンリルクレジット』硬貨１２枚（二人分）を手渡す。

「袋の方には、戦闘で使われる消費アイテムが入ってます。これからたくさん使うことになるので持っていて損はないと思います。ちなみに本来はこの袋に、討伐したアラガミの素材が封入されます」

「ありがとうございます」

礼を言ってハイドは報酬を受け取ったが、もう全身が笑ってしまっているので少しでも気を抜けば落しかねなかった。

「お疲れ様でした。ゆっくり休んで下さいね」

「はい…」

ようやく報告が終わったハイドはコウタの横に腰を下ろす。

（…明日筋肉痛で動けないとかないよな…）

勤務初日でこの疲労感…まさにお先真っ暗である。

（さて…ペンも満足に握れないけど、さっさと報告書片付けるか。早く身体洗って寝たいし）

そんな思考をしてハイドは報告書にペンを向けた。

「……タ……ウタ……コウタ！」

「…んぁ？」

ハイドの呼び声にコウタは目を覚ます。

「…あれ？俺は…」

「誰？とか言うなよ？お前、報告書の説明受けている最中に眠っちゃったんだ。１時間くらい寝てたよ」

「…そっかぁ…じゃああと１０時間…」

「寝るなっ！報告書はもう片付けたから、あとは食事とってシャワー浴びるだけだ！」

ハイドの言葉にコウタが反応する。

「食事…飯……メシ！」

言われて急に空腹を覚えるコウタ。

「ほら、食堂いくぞ」

「おう！」

いきなり元気が出てきたコウタであった。

食堂にたどり着くと、中には食事をしているゴッドイーターたちが何人かいた。皆任務に駆り出されているのか人数は少ない。二人が食堂の中を見回していると後ろから配膳係のおばちゃんに話し掛けられた。

「おや、見ない顔だね…新人さんかい？」

「ええ、まあ」

ハイドはおばちゃんに返事をする。

「勤務何日目なの？」

「まだ初日だよ」

今度はコウタが返事をする。

「そうかい。新人の初日の訓練といえば『あれ』だからねぇ～…二人とも大変だったでしょ」

（大変なんてレベルの話じゃないなあれは）

などとハイドとコウタは思う。

「じゃあそんな二人にはこのメニューだね。『フェンリル特製栄養特化定食』！」

「何それ…」

コウタが反応する。明らかに怪しい…名前が。一歩引いてしまっても仕方がない。

「フェンリルはもともと製薬会社でね。薬以外にも、栄養に関する研究もやってたのさ。その研究成果の結晶がこの定食でね。完食すれば、一日に人体に必要な栄養素を全て、無駄なく摂取出来るのさ。しかも、フェンリル独自の秘密の科学技術で、全ての栄養素それぞれを身体に吸収しやすくする成分も入ってるんだよ。勤務初日の新人さんは朝から何も食べてないからね～。おまけに筋肉をめたために痛め付けるし…。だから味の保証は出来ないけど、今まで新人には例外なくこのメニューを出してるのさ。」

味の保証はできればしてもらいたいのだが、腹に収まれば何でもいいやとハイドは思った。このご時世だ。贅沢は言ってられない。

「わかりました」

「じゃあ一人５０ｆｃね」

「……」

今二人の所持金はそれぞれ６０ｆｃ……ここで５０ｆｃ払えば残りは……

「コウタ……」

「……何？」

「……無駄遣いは禁物だぞ……」

「…了解…」

そして二人はお金を払い定食が載ったトレーをテーブルまで持っていった。

「大丈夫かな……味……」

定食とはよくいったもので、コップに注がれた飲み物はオレンジ色の液体で、皿に盛りつけられたものも全てレーションという栄養食品である。

「……いただきます」

食事が終わったあと二人はシャワールームに来てシャワーを浴びて

いた。

「なあハイド」

「何？」

「あの定食割と美味かったよな」

「ああ…」

予想に反して味は普通だった。いや、それどころかむしろおいしかった。空腹の度合いがその味を助けているのかもしれない。
背中をタオルでわしわし洗いながらハイドはコウタに答える。

「な～…やっぱココしんどくね？トレーニングは量多いし収入は少ないし…」

「収入が少ないのはアラガミを倒してないからだと思うけど…」

「ていうかさ～…やっぱこの腕輪邪魔なんだよね～…身体洗う途中でゴツゴツ当たって痛いし…」

「……確かに」

実際ハイドも頭を洗っているとき何度か腕輪をぶつけていた。

「これって肉体と完全に融合してるから一生取れないんだろ？」

「らしいね…まあそのうち慣れるよきっと」

二人は何とか一通り身体を洗い終わりシャワールームを出た。

「じゃあお互い明日も頑張ろうぜ」

新人区画の自室の前でコウタが言った。

「うん。…あ、コウタの部屋って隣なんだ」

朝はすぐにシュンについてエントランスに移動したため確認していなかった。確かにコウタの部屋がハイドの部屋の隣に位置している。

「おう！いつでも遊びに来ていいからな！んじゃっおやすみ～」

「ああ、お休み」

笑顔でハイドはそう答えると自分の部屋に入る。

改めて見ると本当に綺麗な部屋だった。

「外部居住区の皆…どうしてるかな…」

ゴッドイーターとなった自分は今、（この時代にしてはだが）随分と優遇された立場にいる。配給や報酬…寝床もしっかりしている上、アラガミと戦える力も手にした。外部居住区の皆と別れるとき一部の人間から羨望と嫉妬の眼差しで見られ、ハイドはそのことに申し訳なさを感じていた。

「……寝るか」

ハイドはベッドに潜り込み明日以降の生活に思いを馳せる。休みに

なったら皆にお土産をいっぱい持っていこう…それがゴッドイーターになった俺に出来ることだから…そんなことを思っていたが、目を閉じた瞬間に疲労しきった肉体がすぐさまハイドを眠りの海に引きずり込んでいった。

五喰：睡眠と食事を貪る者（後書き）

本当にフェンリルの食事ってどうなってるんだろう…。イラスト集にはエントランスで第一部隊が食事してる描写があったんですが、どういうシステムで食事が出てくるのか分からなかったので、今回は自分の勝手な都合でフェンリルに食堂を設置しました（笑）

いや……でも、多分あると思います。あるハズ…（汗）

あ、あと主人公のエディット設定を紹介します。ゴッドイーター持ってる人はこれでイメージして下さい。

ヘアスタイル：5
ヘアカラー：4
フェイス：1
スキン：6
トップス：3
ボトムス：3
ボイス：2

以上が神霧ハイドのキャラ設定です。個人的にボイス2はすごいお気に入りなんです。『ゴッドイーター』のときは仲間をリンクエイドするとき、「まだいけるか？」や「仕事の続きだ」などという声をかけるんですよ。しかもクールだけど優しくて温かい印象を与えるカッコイイ声で。自分の理想的なキャラボイスでした。なので『バースト』になってから冷たい台詞が増えたのが残念な気持ちになったという記憶があります。

六喰：兵装訓練（前書き）

ハイドが神機の扱いと強化方針について悩みます。そしてようやくリッカの姐御登場です。

六喰：兵装訓練

あの地獄の特訓から一週間が経過した。すでにハイドとコウタは、オラクル細胞と適合して強化された身体に慣れており、引き出す力も理論上はほぼ１００％という、計測器からの結果も得ていた。

今二人は神機の扱い方について学んでいるが、それもすでに最終過程となっていた。

「……以上のように、異なるオラクル細胞を捕喰した神機はそれを解体、生成することでバレットを入手できる。そのバレットを『アラガミバレット』という。どんな弾が手に入るかは捕喰したアラガミによって異なる。『アラガミバレット』はもちろんアラガミに対して撃つことも可能だが、仲間の神機へ撃ち渡すことでその神機使いを強化することができ、更にその神機の中でアラガミバレットを解体、生成することで『濃縮アラガミバレット』を入手できる。通常のアラガミバレットより強力なうえ、そのバレット、及び神機使いのバーストレベルを二段階まで引き上げることができるようになる。これが新型神機使いの新しい戦術、『リンクバースト』だ。なおこの『リンクバースト』は、使用者の身体的ダメージが大きくなるのを防ぐためにレベル３までしか発動できないよう調整されている。…ここまでの説明は理解できたか？」

「はい」

ハイドはツバキの長い説明を理解しハッキリと言い切った。

「よろしい。では早速演習を始めよう。」

そう言ってツバキは合図を送ると、床から牙が片方欠けた大きな獅子が競り上がってきた。

「うわぁっ！」

横にいたコウタがビックリして飛びのき、ハイドは身構えたが、その獅子はぴくりとも動かない。

『……？』

「安心しろ。それは訓練用のダミー模型だ。」

ツバキの言葉に二人は安心する。それはそうだ。いくら鬼教官ツバキだからといって、なんの実戦経験もなくこんなアラガミと戦わせたりするはずがない。

「ハイド。その模型の中には、オラクル細胞の詰まったパックが埋められている。模型を捕喰してバーストした後、コウタにアラガミバレットを受け渡せ。」

そういうことかとハイドとコウタは理解した。

「了解！」

ハイドは神機に意識を集中する。すると神機のパーツがモゾモゾと動き出し、中から黒い大きな口が出てきた。それを模型に向けて突き出すと捕喰が始まり、模型の外殻とともに中に詰まったパックが口に飲み込まれた。

その瞬間、ハイドは身体の奥底から膨大な力が湧き出てくるのを感

じた。

「これが…バーストか…！すごい力だ…！」

オラクル細胞が活性化した影響で身体中が発光し、ありとあらゆる感覚が研ぎ澄まされていく。

続いてハイドは、神機を剣形態から銃形態へと変形させるため、神機を握っている右手に意識を集中させる。神機は捕喰形態に加え、剣、銃、装甲の展開など、ほぼ全ての動作を神経伝達によって行うことが出来る。いわば体の一部だ。

剣が収納され、収納されていた銃が顔を出した。そして入手したアラガミバレットを装填し、コウタの神機に向けて発射する。

光を纏ったアラガミバレットはコウタの神機にまっすぐに飛び、命中した。

「うおおぉぉぉ！！すっげぇ！！」

コウタもまた溢れ出す力に驚く。

「よし…バーストの演習はこれで終了だ。コウタ、お前は先に戻れ。ハイドにはいくつか言っておかねばならんことがある」

「え？あ…はい！わかりました。じゃあハイド、俺先に戻ってるからな」

「ああ…」

コウタが訓練場を出たのを確認して、ハイドはツバキの方へと体を向ける。

「お前だけ残してすまんな」

「いえ…話ってなんですか？」

ハイドはツバキが自分をこの場に残した理由を聞く。

「お前には特に、頑張ってもらわねばならんのだ」

「？はい、もちろん頑張りますが…」

ハイドはツバキが何を言いたいのか、いまいち掴みかけていた。

「チームに一人投入するだけで…ミッションの成功率の向上や隊員の生還率の向上…ミッションに要する時間の短縮にまで貢献すると言われている新型神機使い…それにお前は選ばれてしまった」

「……」

「一人で遠距離、近距離それぞれをこなすという戦法…戦闘中に神機を変形させるという今までにない動作…剣、銃、装甲、それぞれ三種…計九種類の兵装を扱うなど、新型神機使いにかかる負担は大きい。それゆえお前には、通常の神機使いよりもやらなければならないことが山ほどあるんだ…」

ああ、そういうことかとハイドは納得する。

「それにこの極東支部の連中は、新型神機使いを見たことがない…

お前にかかる期待も大きくなるはずだ」

「ツバキさん…」

ハイドが口を開いたので、ツバキは一旦話を止めた。

「選ばれてしまった以上仕方のないことですよ。それに拒否権もないんでしょう?まあ『嫌だ』とか『やめたい』とか言う気もありませんが…。ただ、僕が努力することで皆の負担が軽くなるのなら…どんなに沢山のことをこなすことになっても構いません」

そう言い切ったハイドの瞳には強い意志が宿っていた。

「……そうか。つまらんことを話をしてすまなかったな」

「いいえ。そんなことはありませんよ」

「私から言いたいことはそれだけだ。戻っていいぞ。」

「はい！」

そしてハイドも訓練場から出ていった。ガラス越しに訓練を見ていたツバキ。その横でデータを取っていた研究員が彼女に言う。

「強い子ですね…」

「フ…ああ…そうだな」

ハイドは神機を『神機保管庫エリア』に格納したあと、整備場へと向かった。聞いておかなければいけないことがある…その話の内容

的に、ツバキよりも実際に整備している人に聞いた方がいいと判断したからだ。

整備場の中は、汗と白いタンクトップとゴーグルの男達の巣窟だった。その中の一人がこちらに気づいて近づいてきた。

（…随分と華奢な人だな…というより……女の子？）

男ばかりだと思っていた整備場には女の子が一人だけいた。顔に少し黒い汚れがついているが、そのせいで元々の肌の白さが際立ち、つぶらで大きな瞳は幼さを残している。

「あれ？見ない顔だね…新人君？」

女の子は腕を組み、小首を傾げて聞いた。

「はい、先週入隊した神霧ハイドです」

ハイドは「今更だけどまだ挨拶してない人がいたんだな…」と思った。この一週間で一通りは済ませたはずだったが、四日目あたりまでは神機にロクに触っていなかった為、神機整備をしている人に挨拶するのを忘れていた。

「私はリッカ。『楠リッカ』っていうんだ。第一から第三部隊までの神機の整備担当者だよ。よろしくね」

リッカは大きな作業用手袋を外してハイドと握手した。……意外と力強い。

「それで…何の用？確か君が新型神機使いなんだよね？新型神機に

ついて何か分からないことがあって、それを聞きに来たって感じかな？」

「あ、はい…新型神機の変形時間の短縮方法とパーツの制作方針です」

「あ～新型神機特有の悩みってやつか～…」

リッカは首を捻って考え込む。そして少しの間をおいて口を開く。

「神機の変形については…残念だけど慣れるしかないね。神経伝達で変形してるから、慣れれば動作も速くなると思うよ。ただ、変形機構のパーツが摩耗したりすると、少しだけどタイムロスが出るから、神機の変形に違和感を感じたらすぐに教えてね」

「慣れ……ですか。わかりました」

「あとはパーツの制作と強化の方針だね。これについては『この方がいい』みたいな定義はないけど、最初は属性値の高さよりも、その人の扱い易い武器を優先して強化した方がいいと思うんだ。どの武器や装甲も、満遍なく強化出来ればそれが一番いいんだけど…そんなことしたら手持ちの素材もお金も無くなっちゃうしね。まずは君にとって使い易い武器の組み合わせを探してみたらどうかな？…まあこれは私の個人的な意見だからあまり参考にならないかも知れないけど…」

といってリッカは頬を人差し指でポリポリ掻く。

「いいえ、すごく参考になりました。ありがとうございます！」

「ふふっ…どう致しまして。…ところで君っていくつなの？」

リッカはふと興味が出てハイドに質問する。

「え？…１８ですが…」

「タメじゃん！敬語はやめてよ～」

「いや、リッカの年齢知らなかったし…」

「順応はやっ！」

「……ぷ…くくっ…」

「…ふ……あははっ」

二人はひとしきり笑ったあと…

「んじゃ、改めてよろしくねハイド」

「こちらこそ、世話になるよリッカ」

「リッカの姐御ぉ～！！ちょっと来て下さ～い！！」

と、リッカの後ろから若い整備士が叫ぶ。

「じゃあ、もう戻るね」

「うん」

リッカは軽く手を振って職場に戻って行った。

（姐御…けっこうキャリアあるのかな…見た感じ年上の整備士にまで指導してるし）

そしてハイドも整備場を出た。

（そうだよな…まずはたくさん神機に触れてからだ…パーツも全部試して一番やりやすい組み合わせを探して…）

あれこれ考えているうちにハイドはエントランスに戻って来ていた。

「あっハイド～どこ行ってたんだよ～探したんだぞ！」

コウタがぶーぶーと文句を言う。

「悪いな。整備場に行ってた」

とハイドは詫びる。

「整備場？神機もう壊したのか？」

「違うよ。ちょっとな」

「ふ～ん…まあいいや！飯食いに行こうよ！」

腹減ったしさ～、とコウタはハイドを誘った。

「いや、先に行っててくれ」

ハイドはあっさり断る。

「ちょっと用事ができた」

「ちぇ～…わかったよ。けどあんまり遅くなるなよな。明日もあるんだし」

「ああ、わかってる」

そう言ってハイドは訓練場へと向かった。

「ふぅ～……よっと！」

ハイドは呼吸を整えて神機を変形させる。

「だいたい2秒くらいか……まだまだだな」

ハイドは1秒内での変形を目標としていた。戦闘中にもたついている暇などない。

「まあ少しずつ速くはなっているかな…あとは扱い易い武器パーツの組み合わせ探しか…何回訓練ミッションを受注しないといけないのかな…」

気が遠くなるような話だが悩んでいるよりまず実行だと、再び変形練習を繰り返した。

「では神霧ハイド・藤木コウタ両名は、第一部隊に配属してよろしいのですね？」

と、ツバキはシックザールに確認をとる。

「そうだ。新人の実戦指導はいつも通り、リンドウ君で頼むよ。彼が率いる部隊の生存率は極東支部においてもトップだからね。貴重な人材を無駄にしたくはない」

「わかりました」

そう言ってツバキは支部長室を出た。

後日、朝一で呼び出された二人は、第一部隊部隊配属の知らせをツバキから聞き、いよいよアラガミと戦うのだということを実感していた。

「いよいよだな」

「ああ……母さん、ノゾミ…見ててくれよな…」

家族に誓うコウタを見てハイドも気を引き締める。

「明日はハイド、お前が先に任務に出撃することになっている。私の弟がマンツーマンで戦いを教えるから心配するな」

「わかりました」

「その後にコウタが同じような内容の任務に出る。こちらにも私の弟を出させる」

「了解っす！」

「最後にこれだけは言うが…死ぬなよ…必ず生きて帰ってこい！」

『はい！』

明日は二人の初陣だ。

六喰：兵装訓練（後書き）

次の話でようやくリンドウとの初陣です。ここまで来るのが長かった…。

次の話はバトルパートになります。まだ書いたことのない領域なので、たとえつまらなくても大目にみてあげてください。

七喰：リンドウとの初陣（前書き）

ようやくバトルパートです。久々のリンドウ登場です。

七喰：リンドウとの初陣

ハイドはエントランスのソファに腰掛けて人を待っていた。これから出撃する任務に同行してくれる人…ツバキ教官の弟と言っていたが…。

考えにふけっていると、カウンターの方からヒバリの声が聞こえた。

「あ、リンドウさん！支部長が見かけたら、顔を見せにこいって言ってましたよ？」

「オーケー、見かけなかったことにしといてくれ」

ハイドはなんだか適当そうだなと思った。

「いよーぅ新入り」

（この人が、ツバキさんの弟であり、世界各地の支部や本部を合わせても五指に入るほどの力をもつゴッドイーター…）

「俺は『雨宮リンドウ』。形式上お前の上官にあたる…が、まあめんどくさい話は省略する。とにかく、とっとと背中を預けられるくらい育ってくれな？」

「あ、もしかして新しい人？」

その時、たまたま通りかかった、やたらと露出度の高い綺麗に切り揃えたおかっぱの女性が声をかけた。

「お、そういえば名前聞いてなかったな」

二人の視線を受けハイドは姿勢を正す。

「昨日付けで第一部隊配属となりました、神霧ハイドです」

と名乗り、ハイドは一礼する

「俺は名乗ったからあとはお前だけだ」

「はいはい。私は橘サクヤよ。同じ部隊なのね～…助かるわ～」

とサクヤはニコニコしながら言う。

「さて、自己紹介も終わったことだし…あ～今厳しい規律を叩き込んでるんだから、あっち行ってなさいサクヤくん」

「了解です、上官殿」

なんだか慣れた様子の二人だ。

（付き合い長いのかな？）

サクヤはハイドに軽く手を振って去って行った。

「とまぁ、そういうわけでだ…早速お前には実戦に出てもらうが、今回の緒戦の任務は俺が同行する……っと、時間だ。そろそろ出撃するぞ」

「はい！」

二人は神機保管庫エリアに移動し、自分の神機が納められたケースを持ち、ヘリに飛び乗る。

さほど時間はかからずにヘリは任務地「贖罪の街」へと到着した。かつて人々が生活していた大都市だったが、アラガミの出現直後に崩壊し、無惨に食い破られたビル郡が今も残っている。

「ここも随分荒れちまったな…おい新人、実施演習を始めるぞ。…命令は３つ」

「命令」という単語を聞いてハイドは身をかたくする。

「死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れろ。運が良ければ不意をついてぶっ殺せ。…あ、これじゃ４つか…」

リンドウの数え間違いにハイドは思わず吹き出してしまった。それを見てリンドウは微笑む。

「そうそう、肩の力を抜いてな。とにかく生き延びることだけを考えろ。生きてさえいりゃ、あとは万事どうにでもなる」

「はい！」

リラックスしたハイドの返事に満足したリンドウは街へと向き直る。

「さあて…おっぱじめるか！」

そして二人は夕暮れの街へと駆け出した。

「お！お前の神機のパーツ『ショートブレード』に『アサルト銃身』に『バックラー』か～…また随分とスピード重視の組み合わせにしたものだな…」

ショートブレードはリーチは短いが、軽くて振りやすく、攻撃の手数が多い。アサルト銃身は扱い易い「弾丸」という種類のオラクルバレットを得意とする銃身で、撃った後の隙も少なく割と軽い。バックラーは防御力こそあまり高くないが、全装甲の中で最も展開スピードが早い。ハイドの今日の神機は超高機動セッティングである。

「今日の討伐対象はオウガテイル一体だぞ？そこまで徹底する必要なかったんじゃないか？」

「戦闘中の神機の変形にどのくらい時間がかかるのか分からないんですよ」

走りながらハイドはリンドウの方を見てそう話す。

「なるほどな…そのタイムロスのカバーってことか。新型神機ってのは何かと面倒だな」

「最初のうちはこの装備でいきます。戦いに慣れていったら違う装備も使って、どんな戦いにもメンバーにも対応出来るようになります」

「ははっ…頼もしいこった」

そんな話をしてたら、二人は討伐目標を発見した。オウガテイルが歩きながらこちらに向かって来る。二人は建物の影に隠れ飛び出すタイミングを窺う。その時リンドウが小声でハイドに後ろから言っ

た。

「一発、ブチかましてやれ」

ハイドは頷くと、物影から勢いよく飛び出す。

突然飛び出してきたハイドにオウガテイルは警戒態勢になるが、ハイドは素早く横に回り込み五回の斬撃を入れる。

オウガテイルが怯んで倒れ込み、ハイドは素早く神機を構える。

中から黒い口が出現し、それをオウガテイルに突き出す。

「隙だらけだな！」

ブシュっと血の吹き出る音がして、オウガテイルの血肉を噛みちぎられた。

「うおおぉぉぉ！！！」

身体に力がみなぎりハイドはバーストした。その間にオウガテイルが立ち上がり、ハイドに噛み付こうとする。ハイドはバックステップで後ろに下がりながら神機を剣から銃へと変形させる。

（まだ2秒か…）

更にバックステップで距離をとるハイド。するとそれを見たオウガテイルは、尻尾を一度振り、もう一度ハイドに向けて大きく振る。

オウガテイルの尻尾から放たれたのは、三方向へ飛ぶ刺だった。し

かし刺が放たれるまでの一瞬の間に、ハイドは距離を詰めてその銃口をオウガテイルに向けていた。

「喰らいな！」

その言葉とともにアラガミバレットが放たれた。

近距離で強力なアラガミバレットを撃たれたオウガテイルは苦悶の声をあげる。

「これで終わりだっ！！」

神機をすぐさま剣へと変形させたハイドがとどめの一閃。

「おーおー…俺の出る幕なしか…」

「リンドウさん！」

影で見守っていたリンドウが出てきた。

「ああ、そうそう。倒したアラガミは捕喰して素材を回収しとけよ」

「あっはい！」

そしてハイドはオウガテイルを再び捕喰し、素材を回収した。

「んじゃ、引き上げるか」

「そうですね。行きましょう」

二人はヘリの待機地点へと向かって歩いていく。その後ろでは残されたオウガテイルの肉片が黒く霧散し地面に引きずり込まれるように消えていった。

「しかしなかなかやるな～…この分だと小型アラガミ程度なら俺がいなくても大丈夫か？」

「なに言ってるんですかリンドウさん。僕はまだ一度しかミッションに出撃していないんですよ？」

「はは…冗談だ」

帰投する途中のヘリの中で、ハイドとリンドウは言葉を交わしていた。

「まああれくらい動ければ問題ないだろう…だがなんにしても、生き残れよ」

「はい…」

何となくだがハイドは、リンドウが世界屈指のゴッドイーターと言われるわけがわかる気がした。何よりも生き延びることを大切にし、彼自身もその言葉を守って今、こうして生きている。

リンドウは後に、ハイドの憧れであり…目標となるが、それはまだ先の話である。

二人を乗せたヘリは風に揺られながらアナグラへと帰っていった。

七喰：リンドウとの初陣（後書き）

リンドウを空気にしてしまいました。リンドウファンの方ごめんなさい…。

バトルを読みやすく書けたか不安です。これから先のバトルも不安です。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』（前書き）

ちょっと短めですが会話が一方的に長い話です。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』

「やぁ～来たね～」

初任務が完了した後、ハイドとコウタは榊博士の部屋を訪れていた。

「講座を開くから研究室に来てほしい」とお呼びがかかったのだ。

「さあ、適当なとこに掛けてくれ」

言われて二人は手近なソファに腰掛ける。それを見て榊が咳ばらいし、講座が始まった。

「さて、いきなりだけど…ハイド君はアラガミってどんな存在だと思う？」

「アラガミの存在…ですか…？」

「『人類の天敵』、『絶対の捕喰者』、『世界を破壊する者』…まあ、こんな所かな？これらは認識としては間違っていない。むしろ、目の前にある事象を素直に捉えられていると言えるだろうね…」

『……』

「じゃあ、何故どうやってアラガミは現れたのか…って考えたことあるかい？…君たちも知っている通り、アラガミはある日突然現れて、爆発的に増殖した…そう…まるで進化の過程をすっ飛ばしたようにね」

「ふぁ～……」

とあくびをしたのはコウタだ。

「なぁ～…この講義ってなんか意味あんのかな？アラガミの存在意義なんてどうでもよくね？」

とコウタは小声でハイドに話す。

「そうかね？」

いつの間にか榊がコウタの後ろに立っていた。コウタがビックリしてすぐさま振り返る。

「アラガミには脳がない。心臓も脊髄すらもありはしない。私達人間は、頭や胸を吹き飛ばせば死んじゃうけど、アラガミはそんなことでは倒れない。アラガミとは考え、捕喰を行う一個の単細胞生物…『オラクル細胞』の集まり…そう、アラガミは郡体であり…それ自体が数万、数十万の生物の集まりなのさ。そしてその強固でしなやかな細胞同士の結合は、既存の兵器では全く破壊出来ないんだ。じゃあ私たちはアラガミとどう戦えばいいんだろうね？」

「え、え～と…とにかく神機で斬ったり撃ったり…」

焦りながらもコウタが榊の質問に答える。

「そう…結論で言えば、同じオラクル細胞が埋め込まれた生体武器『神機』を使って、アラガミのオラクル細胞結合を断ち切るしかない…。だが、それによって霧散した細胞群も、やがては再集合して…また新たな個体を形成するだろう…。彼らの行動を司る指令細胞群である、コアを摘出するのが最善だけど…これは中々困難な作業

なんだ。『神機』を持ってしても、我々には決定打がない。いつの間にか人々は、この絶対の存在をここ極東地域に伝わる八百万の神にたとえて『アラガミ』…と呼ぶようになったのさ」

（アラガミはそんな生命体だったのか）

ハイドは自分が戦っている敵の強大さを思い知らされた。

「さて、今日の講義はここまでとしよう。なお、アラガミについてはターミナルにあるノルンのデータベースを参照すること。いいね？」

榊が講義の終了を宣言するとコウタは伸びをして立ち上がる。ハイドも立ち上がり、二人は部屋を出た。

「俺たちが倒したあのアラガミも、また別の形で復活するってことなのか……」

「なんか…やだよな～…折角の努力が水の泡になるのって…」

アラガミについての講義を聞いた二人は、彼らの脅威に打ちのめされた気分だった。

「…でも…」

「…うん…戦うしかないんだよな」

そう。それ以外に生き残れる方法は、今のところはエイジス計画くらいしかない。しかも計画が成功する保障もない。エイジス計画など簡単に打ち砕く強大なアラガミが出現する可能性だってある。結

局のところ、人間は神を語る単細胞生物と戦いつづける運命にある。

「エイジス島が完成するまでは気が抜けないな！」

とコウタは言う。

（エイジス計画にちょっと依存してるのかな？俺が心配し過ぎなだけなのか？）

などと考えていたハイドは、すぐに思考を断ち切る。

（あれこれ考えていても仕方ない…今はまず生き延びることだ。）

「ああ、そうだな」

とハイドはコウタに返事した。そして二人は、明日以降も続く終わりなき戦いに備えるため、自室に戻り身体を休めた。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』（後書き）

榊博士…無駄なく話してますがそれでも長いです。

書いててコウタばりに眠くなりました。

九喰：サクヤとの合同任務（前書き）

サクヤ姉さんが華麗に戦います。書けたかどうかは別として、自分の中では華麗なんです。……すいません、やっぱり華麗じゃないかも。

九喰：サクヤとの合同任務

榊の講義から一夜明け、ハイドはノルンのデータベースを調べていた。まだキーボードの扱いに慣れていないため、そのタイピングは端からみると微笑ましい。

（アラガミ…オウガテイル…）

少し調べればすぐに目的の項目は見つかった。

『オウガテイル…鬼の顔のような巨大な尾を持つ小型アラガミ。主に他のアラガミの死骸などを捕喰し、様々な地域でその数を増やしている。発生地はアメリカ大陸だが、現在では世界で最も個体数が多いアラガミとされている。』

「ふう…」

倒してもやがては復活するアラガミ達…これではまるでいたちごっこだ…というより我々人間の方は、やがてはじり貧になっていくだろう。

（アラガミを完全に討ち滅ぼす方法は本当にあるのか…？）

まだ見つかるはずのない答えを探すことを止めたハイドは、ターミナルを立ち下げた後、エントランスへ向かった。

今日はサクヤとの合同任務だ。聞いた話では、サクヤは旧型銃身神機使いのようだ。

（おそらく自分は前線で陽動、サクヤさんは後方でバックアップといったところだろうな。）

ハイドの今日の神機は、先日リンドウと行ったミッションでの装備とまったく同じ『超高機動セッティング』である。今日の討伐目標は『コクーンメイデン』だ。その場を全く動かないこのアラガミは、頭部からレーザー…開いた胴体からは無数の鋭い刺…視覚の広さを利用して敵を見つけることができる。現在世界に広く生息し、一つの場所に集中して大量発生することもある…などという特徴があるアラガミだ。

ハイドがエントランスのソファでデータベースから仕入れた情報をおさらいしていると、サクヤがやって来た。先日と同じ露出度の高い格好である。

（みんな他の服持ってないのかな？）

服に対する疑問が頭に浮かぶがすぐに打ち消し、ハイドはサクヤに挨拶した。

「おはようございます。サクヤさん」

「はあ～い。おはよう」

明るい挨拶で「気さくなお姉さん」の雰囲気を出しているサクヤ。

「今日の任務ではよろしくね！」

と、サクヤは微笑みながらハイドに言った。

「はい！こちらこそ、よろしくお願いします！」

二人の今日の任務地は「嘆きの平原」だ。常に雨が降り続けている地域で、丸く広い平原となっているこの場所は、かつてはビルが建ち並ぶ都市の一部だった。今となってはアラガミの徘徊ルートになっており、その中心に吹き荒れる巨大な竜巻は、実はアラガミが引き起こしているのではないかと言われている。因果関係があるのかは不明だが、この近辺は巨大なアラガミも目撃されている。

サクヤはアラガミの声が辺りに響いたのを聞くとすぐに表情を変え、さっきまでとは打って変わって真剣な空気を漂わせた。

「早速ブリーフィングを始めるわよ。」

ここに来るまで聞いていた優しい声、それが今はただただ凛々しい。

「今回の任務ではハイドは前線で陽動、私は後方でバックアップします。遠距離型の神機使いとペアを組むときは、これが基本戦術だからよく覚えておいて。くれぐれも先行しすぎないように。後方支援の射程内で行動すること…ＯＫ？」

「はい！」

ハイドの声を聞いたサクヤは「ふふ…」と微笑んだ。

「ちょっと緊張してる？」

「あ…はい…」

「肩の力抜かないといざという時身体が動かないわよ？」

サクヤはそう声を掛け、ハイドの緊張をほぐす。

「…わかりました！」

やはり経験と生きた歳月の違いか、リンドウもサクヤも緊張のほぐし方が上手だ。リンドウは冗談で、サクヤはギャップで隊員の気持ちを落ち着かせる。この辺り「さすがだな」と思うハイドである。

「ん！素直でよろしい！頼りにしてるわ。…さあ、始めるわよ」

再び声と表情を戦闘モードに切り替えるサクヤ。それに頷いたハイドは、待機地点から飛び降りて今日の討伐目標…コクーンメイデン３体の索敵を始めた。

そしてハイドはまず一体目のコクーンメイデンを発見した。向こうはこっちより先に気づいたらしく、レーザーを放ってくる。ただ目標に向かってまっすぐに飛ぶレーザーはホーミング性能がない…そのことを知っていたハイドは横にスライドしてかわす。続けてレーザーを撃ってくるがそれもかわし、大きくジャンプしてコクーンメイデンの後ろを取った。コクーンメイデンがこちらを向いた瞬間に、その頭をレーザーが貫いた。サクヤが後ろから、コクーンメイデンの頭を狙ってくれていたのだ。

ハイドは怯んでぐったりと身体を倒し、だらし無く開いたコクーンメイデンの胴体に捕喰形態の神機を突っ込んだ。

「これでどうだ！」

バーストしたハイドは一気に斬撃を叩き込み、一体目のコクーンメ

イデンを撃破する。

（さすがね～…今日は余り補助しなくて済みそうかな？）

なんて不謹慎なことを思うサクヤ。もちろんそんなことするつもりは彼女にはないが。

そうこうしているうちにハイドは地を駆け、二体目のコクーンメイデンに向かっていた。ハイドとコクーンメイデンの距離が２０ｍほどになったときサクヤはレーザーを放った。レーザーはハイドの脇をすり抜けるように飛び、コクーンメイデンの頭にまた命中した。バーストが続いていたハイドは再び斬りかかり、あっという間にコクーンメイデンを倒す。

「（…あと一体か）サクヤさん！」

そしてハイドは剣形態から銃形態へと神機を切り替え、サクヤに光の弾を三発発射する。

「え！？なに！？」

突然のハイドの行動に驚くサクヤ。そしてその弾はサクヤの神機に命中し、『リンクバースト』が発動した。力がどんどん溢れてくる身体にサクヤが驚く。

「なんなのこれ…すごい力…！」

サクヤはゴッドイーター人生で初のバーストを発動した。それは旧型銃身神機は捕喰機能が備わっていないのと、機能が備わってる旧型刀身神機にアラガミバレットを受け渡すのに必要な銃身がついて

いないことが関係している。

（これがリンドウやソーマがいつも発動しているバーストなのかしら…？だとしたらちょっとズルイわね…後で文句言おうかな）

そしてサクヤは自分の神機に装填した覚えのないバレットがあることに気づく。

「…そういうことね！」

サクヤがバーストした変わりに、ハイドのバースト時間が切れた。二人は最後のコクーンメイデンへ向けて駆け出す。

コクーンメイデンは二人を見つけるとすぐさまレーザーを放つが、二人はそれをかわし、まずハイドが地を蹴り飛んだ。ショートブレードを突き出して空中から一気に突進する。コクーンメイデンはその剣に切り裂かれたのち…。

「終わりよ！！」

サクヤの濃縮アラガミバレットＬＶ３の直撃を受け、最後のコクーンメイデンはその活動を停止させた。

九喰：サクヤとの合同任務（後書き）

旧型銃身神機使いは大変ですよねホント。オラクル細胞の補充は飲料物のみ。バーストは新型がいないと不可。不便過ぎます。

十喰：ソーマとの合同任務（前書き）

ソーマファンの皆さんお待たせしました。ソーマ登場回です。

十喰：ソーマとの合同任務

アラガミを一通り殲滅し終えた後、ハイドとサクヤはアナグラへと向かっていた。

「それにしてもさっきのアレ…なんだったの？」

「アレ…？」

「私を強化した、アレ」

ああ、とハイドは納得した。サクヤが言った「アレ」とは…

「『リンクバースト』のことですね。」

「『リンクバースト』…？」

サクヤは聞き返す。リンクバースト？『バースト』ではなく？なにか違うのだろうか？

「新型神機使い専用の新しい戦術です。アラガミを捕喰した際に手に入る、アラガミバレットを他者の神機に撃ち渡すことで、その者を半ば強制的にバーストさせる方法です。通常のバーストよりも力の増大が激しいため、バーストＬＶは３までしかあげれません。バーストＬＶは、撃ち渡されたアラガミバレットの弾数によって決まるので、今日サクヤさんが発動したのはＬＶ３のリンクバーストということになります」

ハイドは以前ツバキにされたのとほとんど同じ説明をする。

「へぇ～…確かにすごい力だったわ…」

サクヤは先程の感覚を思い出す。身体の内から強大な力が、まるでマグマのように吹き出たようなあの感覚を…。

「…これからはこの戦術の重要性がどんどん増してくると思います。メンバー全員を見渡して、なおかつその時の状況に応じて、最も助けを必要としている人をバーストさせないといけませんし…捕喰攻撃もなるべく増やして、アラガミバレットを確保して、いつでも仲間をリンクバーストできるようにしなければいけません。新型神機使いは本当にやることが多いです」

と、ハイドは力無く笑った顔で言った。

（そっか…いつの日か、誰よりも大変な戦いをしなければならないのね、この子は…）

サクヤはそう思う。新型神機は、剣も銃も盾もバーストもリンクバーストもできて便利…というわけではない。使える戦術が多いために、やらなければならないことがたくさん出てくるのだ。サクヤはハイドに励ましと労いの言葉をかける。

「まあ何はともあれ、今日はお疲れ様！あなたが一人前になるまでは、私もリンドウもできる限りサポートするから、安心して」

ハイドはサクヤにそう言われると…

「サクヤさん……ありがとうございます！」

ニッコリ笑って感謝した。

サクヤとの任務があった次の日、ハイドは任務で『鉄塔の森』と呼ばれる場所に来ていた。この場所は、近隣の都市に電力を供給していた発電施設の跡だ。環境の急激な変化による緑化と、乱立する鉄塔によって、その景観は森林の様相を呈している。アラガミによる地下施設の侵喰によって大部分が水没しており、かつての喧噪が絶えたあとは、水の流れる音だけが悲しく響き渡っている。

今日の任務は自分を含めて三人の部隊で臨むことになっている。

ハイドが神機を持ってヘリから降りると、少し離れたところで青いモッズコートのフードをかぶった白髪褐色肌の青年と、胸、腕、腹、背中に書けてタトゥーが入っている、赤髪でサングラスをかけた青年がなにやら話をしていた。

ハイドが近づくとサングラスの青年が手を振りながらこっちにやってきた。

「ああ、君が例の新人クンかい？噂は聞いているよ。確か神霧ハイド…だったかな？僕はエリック。エリック・デア＝フォーゲルバイデ。君もせいぜい僕を見習って、人類のため華麗に戦ってくれたまえ」

「は…はあ…」

（なんか…ちょっと変わってる人だな…）

そんなことを思っていた次の瞬間…。

「エリック！上だ！」

その言葉についハイドは、反射的に後ろに飛びのいてしまった。

「しまっ…！」

「え？」

時すでに遅し…頭上から飛び降りてきたオウガテイルがエリックに襲い掛かった。

「うっ、うわあぁぁぁぁ！！！」

とエリックが叫んだときにはすでに彼の上半身が無かった。一気に人間の半身を捕喰したオウガテイルは下半身もあっというまに喰らい尽くしてしまった。

「ボーっとするな！」

そう叫び青年は巨大な刀身、『バスターブレード』を振るう。

倒れているオウガテイルを尻目に、青年はハイドにぶっきらぼうな口調で言った。

「ようこそ…クソッタレな職場へ…俺はソーマ。別に覚えなくてもいい。言っとくが、ここじゃこんなこと日常茶飯事だ。」

そう言ってソーマは神機をハイドに向ける。

「お前はどんな『覚悟』を持ってここに来た…？なんてな……時間だ。行くぞルーキー。…とにかく死にたくなければ、俺にはなるべく関わらないことだ…」

一方的にハイドにそんなことを言ったソーマは一人で先に行ってしまった。

ハイドの心臓の鼓動はまだ高鳴ったままだった。目の前で人が死んだ…アラガミの手によって。『あの日』の記憶が脳裏をよぎる…。だがハイドは「今だけは忘れよう」と頭を切り替えた。『過去』も…エリックも…。まだこれから任務もあるのだ。悲しんだり落ち込んだりするのは任務が終わった後ですればいい。

瞳をキツく閉じて、頭をブンブンと左右に振ったハイドは、先に行ってしまったソーマのあとを追った。

ハイドはソーマと合流できたが、すでに彼はアラガミと交戦中だった。

（…来たか）

戦いながらソーマは思う。

今日の任務の討伐目標は、『オウガテイル』二体と『コクーンメイデン』二体の計四体だ。慣れていなければ、二人で相手どるのは難しい。動き回るオウガテイルを狙えば、コクーンメイデンがホーミング性のあるレーザーでこちらを狙ってくる。コクーンメイデンを

先に潰そうものなら、背後からオウガテイルが狙ってくる。
だがソーマは敵の攻撃などものともせず、たった一人で対等以上に渡り合っていた。

（すごい…）

ハイドはソーマの戦いの上手さに半ば見とれていた。

（そういえばソーマは俺と同じ歳だけど、神機使いとしては古株なんだよな…）

弱冠１２歳で神機使いとして戦場に出たソーマ。すでに６年のキャリアがあるが、協調性がない上、軍規違反が多いため階級はあまり高くない…そんな話をリンドウから聞いたことがある。

（それよりどうするかな）

見るとソーマは現在オウガテイル二体と戦っていた。
そのソーマを近い方のコクーンメイデンが狙っていた。

（まずは…あいつからだ！）

そしてハイドはコクーンメイデンの死角から入り込み神機を喰らわせる。不意打ちを食らったコクーンメイデンは後ろに振り向くが、その瞬間にハイドに斬り伏せられた。

「ソーマ！」

ハイドはソーマにアラガミバレットを三発撃ち渡す。ソーマの旧型刀身神機はバレットこそ撃てないが、ＬＶ３の剣撃もかなりのダメージを与えることができるはずだ。

「……ほう」

強化された肉体に多少は感心したのか、ソーマは声を漏らす。そしてソーマは自分の前後から向かってくるオウガテイルを斬り倒して、残った一体のコクーンメイデンへと駆けた。

そしてソーマは大きく飛び、神機を振りかぶった。横からはハイドも詰めてきていた。

「くらえ！」

「死ね！」

ハイドの横一閃、ソーマの縦一閃がほぼ同時に交差し、コクーンメイデンは四分割された。

倒したアラガミの素材を回収し終えたハイドは、ソーマの方へと戻った。

「終わったか…なら戻るぞ」

またもぶっきらぼうにソーマは言ったが、その手にはそれぞれ神機が入ったケースが一つずつ持たれていた……。

（ソーマ……あんな性格だけど、もしかして人には優しいのかな……？）

ソーマの背中を追って歩くハイドはそんなことを思っていた。そして同時に……。

（エリック……すまない。…俺が気づいていれば…驚いて後ろに飛びのいたりしなければっ…）

後悔と自責の念は曇り空へと消えていく…。二人を乗せたヘリは、アナグラへと向かって飛び立って行った。

十喰：ソーマとの合同任務（後書き）

やはりソーマはカッコイイです。ハイ。そして……

エリック～～～～！！！死なせてゴメ～～～ン！！！きっと何かの形で出番作るから～～～！！！

十一喰：神霧ハイドの落ち込み（前書き）

ハイドが落ち込む話です。……え？サブタイトルが某作品に似てる？……気のせいではないでしょうか。アハハ

十一喰：神霧ハイドの落ち込み

「……」

ソーマとのミッションの報告が終わったハイドは、エントランスのソファに腰掛けて一人感傷に浸っていた。

彼の身体から発する暗いオーラに、周りの人達はなんだか声を掛けづらかった。

理由はみんなわかっている。ハイドが今日行ったミッションで、ゴッドイーターが一人、殉職した。それも目の前で…。

いつまでも動き出さない自分に踏ん切りをつけ、一人がハイドに向かって歩いていく。それを見た二人も彼についていく。ハイドの前で立ち止まったのは、第二部隊の面々だった。

ハイドが人の気配に気づき、伏せていた顔をあげる。

「ようハイド！最近バリバリやってるそうじゃないか！」

最初が肝心だと努めて明るい声で話し掛けるタツミ。

「お前が戦術や訓練に熱心に取り組んだからこその結果だな」

なるべく今日のことに関する話題からそらそうとするブレンダン。

「あ、あのソーマさんともいきなり連携がとれるなんて凄いですよね～あはは！」

……いきなり爆弾をほうり込むカノン。

「ばっ…バカ！カノン！」

「……あっ！！！」

タツミに言われてようやく気づくカノン。三人が恐る恐るハイドを見ると、そこにはまた顔を伏せたハイド……。

「ほら～！！また落ち込んじまったじゃねぇか～！！」

「すっ、すいませんごめんなさい！！！」

「弁解の余地がないな……」

「はう～～～……」

「あきらめるなっ！！なんか考えろっ！！

「ありがとうございます…」

『え？』

ギャイギャイと騒いでいた第二部隊は、突然横から割って入ったハイドの声に静まり返る。

「皆さんは、僕を励まそうとして声をかけてくれたんですよね？その気持ちだけでも…充分ありがたいですよ」

そういって上げたハイドの顔は、涙こそ流していないものの、無理矢理作った感満載のボロボロの笑顔だった。

「ま、まあ今日のことは気にすんなよ。な？」

「そ、そうですよ～。切り替えて明日からも頑張りましょう！」

「明日は我が身かもしれんからな。今日はゆっくり休め。あまり根を詰めると身体が持たんぞ。」

三者三様の励ましの言葉を受けたハイドは…。

「はい。わかりました…」

と答えただけだった。三人はハイドから離れた後で、もう一度彼をみたがやはり、まだ辛そうだった。

「どうする？あまり効果が無かったような気がするが…」

「カノンのミスさえなけりゃなあ～…」

「はう…すいません…」

「どうしたんだお前ら？」

突然野太い声が後ろから響き、それに驚いた三人が振り返る。

『ゲ…ゲンさん！』

身体のあちこちに傷のついた、腕用のバンドで片腕をささえている６０代の男性が立っていた。

三人は「助かった」と思った。

この男は百田ゲン。かつてはゴッドイーターとして戦っていた人物であり、ゴッドイーターを経験した数少ない生き残りである。現在はフェンリル極東支部神機使い相談役となっている。

彼は元正規軍出身であるため、様々な近接格闘術の心得がある。また、始まりの神機『ピストル型神機』が開発された際に、正規軍としては初めて自らその使用者に立候補し、適合者に選ばれる。

などなどの武勇伝があるうえ長い歳月を生きているこの人なら、ハイドにいいアドバイスを与えられるはずだ。

「ゲンさん、実はハイドのやつが…」

タツミはゲンに事の成り行きを話した。

「……なるほどな。やれるだけはやってみよう。」

そう言ってゲンはハイドの方へと歩いていく。ゲンに気づいてすぐさま立ち上がるハイド。

「ゲンさん！」

「ああ、楽にしてろ。隣いいか？少し話したいことがある」

「どうぞ」

そしてゲンは腰を下ろし、少しの間を置いて話しはじめた。

「ハイド…エリックの事は残念だったな…。」

「……はい」

ハイドはゆっくり時間をかけて答えた。

「…なあハイド。あの時、もっと自分が動けたら…なんてこと考えてないか？」

ゲンはハイドの思考を推測し、それはほぼ正解だった。

「……」

「あまり自分を責めるな。俺は二十歳で正規軍に入隊したんだが…軍に在籍していた時も、ゴッドイーターになってからも…俺の周りではたくさんのやつが死んでいった。」

ハイドはただ静かに話を聞いている。

「こんな俺でも人並みに『悲しむ』ことはできたんだ。…だが、人が一人死ぬごとに、そういった感情は少しずつ奪われていった」

「……」

「そのおかげで逆に今、俺は生きている…もしそうだとしたら、俺はそれでも構わん…だが俺は、今ハイドが感じているその感情もまた大切なものだとも思うんだ…」

「ゲンさん…」

「だからなハイド…『強く』なれ。お前はやがてみんなを守る盾となる。お前の仲間を守るために…お前自身を守るために…そしてその大切な感情を失う前に、『強く』なれ」

ゲンは、静かだが…熱く力強さを感じさせる瞳でハイドに言う。

「……わかりました！」

ハイドは今日初めて心から笑顔になった。

とその時、カウンターから小さい女の子の怒声が聞こえてきた。

「エリックに会えないってどういうこと!?なんでみんなエリックは死んだなんて嘘つくの!?」

カウンターを見たら裕福そうな女の子と紳士がいた。

女の子は涙を零しながらヒバリに怒鳴りちらす。ヒバリはその対応に困っていた。

その横にいた五十代くらいの紳士が目をギュッとつむりながら…。

「あの馬鹿息子め、先に逝きおって……！！」

その肩は激しく震えていた。

二人を見ていたゲンは再びハイドに視線を戻す。

「まあ、とにかく死ぬなよ…お前とはいつか酒を飲み交わしたいからな」

「……はい」

穏やかな声でハイドは答えた。

ゲンは先程の二人の会話を聞いて、ハイドがまた落ち込むのではと思っていたが…どうやら大丈夫そうだ。ハイドの瞳は様々な感情が渦巻き、複雑そうな色だったが、ゲンが伝えたいことはしっかり伝わっていたようで、彼の返事からかすかに覚悟と決意が感じ取れた。それがわかったゲンはハイドの肩に手を置き、軽く頷いたあと、立ち上がってタツミたちの方へと歩いていった。

「あ、ゲンさん！どうでしたか？」

戻ってきたゲンにタツミが聞いてみた。

「あいつのことなら心配いらない…大丈夫だ。」

「そうですか…すいませんわざわざ」

そう謝るのはブレンダン。

「気にするな。何せ今は相談役だからな」

そう返したゲンはエレベーターに乗って別のフロアへ移動した。

タツミたちはハイドを再び見るが、その顔にはいくらか明るさが戻っていた。それは先程の、上から糊で貼付けたような笑顔とはちがう笑顔だった。

部屋に戻ったハイドはターミナルを開いた。するとコウタからメールが届いていたことに気づく。ノルンには過去のデータを引き出すだけでなく、ゴッドイーター同士でメールのやり取りができるようになっている。

ハイドらキーボードを操作し送られてきたメールを開いた。

『藤木コウタ

今日行ったミッションで隊員が死んだって聞いたよ。エリックって人には失礼だけど、俺死んだのがお前じゃなくてよかったって思った。

明日の任務はハイドと一緒なんだぜ！初めて一緒に戦えるな！よろしく頼むよ！』

（……ああ。俺からもよろしく頼む）

ハイドは明日に向けて早めにベッドに潜り込む。次の任務ではコウタと…つまりは、極東支部に来て初めてできた『友』と一緒に戦うことになる。そう思うと不思議な高陽感少しと、大きな恐怖が込み上げる。

だがハイドは、ゲンの言葉ですでに心に決めていた。救える限りの人を…みんな救おう。そして自分は何があっても生き続けよう。コウタのように後ろばかりに捕われず、前をしっかり見つめよう。

そんなことを考えていると、やはりリンドウの凄さを改めて認識させられる。

（本当に…リンドウさんは…凄いや…）

飄々としながらもリーダーとしての責務をこなし、ゴッドイーターとして長く生き残っている。ハイドはリンドウに憧れと尊敬の念を抱きはじめた。

（…今はまだ無理でも、いつか俺もリンドウさんのように…）

などと色々思考してる内に、ハイドは忍び寄る睡魔によって夢の世界へと引きずり込まれていった。

十一喰：神霧ハイドの落ち込み（後書き）

サブキャラのゲンさん登場となりました今回の話ですが、ゲンさんが実際に言いそうなアドバイスを想像して書きましたが、如何せん自分がまだ２０代なので、ちゃんと書けてるか不安です。

十二喰：コウタとの合同任務（前書き）

ようやくコウタとのミッションです。リンドウさんを少しだけ登場させた結果、容量が大きくなりそうだったので、急遽コンゴウのミッションを『コンゴウ一体オウガテイル三体』から『コンゴウ一体』に変更しました。

十二喰：コウタとの合同任務

ソーマとの任務から一夜明けた。

ハイドは目を擦りながらベッドから起き上がると、今日の任務の仕度を始める。今日はコウタとの合同任務だ。ハイドは念入りに神機と戦術をチェックする。

そしてノルンのデータベースを開き今日の討伐目標『コンゴウ』について調べはじめた。

『コンゴウ…逞しい猿人の姿を持つアラガミ。俊敏な動きと力任せの打撃が特徴であり、人間を発見すると群れを成して襲ってくる。発生地はユーラシア大陸極東。背中のパイプ状器官から放たれる真空波は要注意』

一通り確認を終えたハイドは、エントランスへと向かうため、エレベーターがある廊下まで歩いていた。するとその途中で、リンドウとばったり会ってしまった。リンドウは「たまには奢ってやる」と半ば無理矢理ハイドを自販機のある場所まで引っ張っていった。

「コーヒーでいいか？」

「あ、はい」

リンドウはコーヒーを買うとそれをハイドに投げ渡す。そしてベンチに座っているハイドの横に腰かけた。しばしの沈黙を破ってリンドウが口を開く。

「エリックのことは残念だったな…って、もう皆から言われてるか？」

「……はい」

ハイドは静かに答えた。

「いや、隊長として何か言わないとなって思ってさ…まあエリックはちぃとばかし変わり者だったが、妹さん想いのいいやつだった。そこは皆から評価されてた…」

「……」

「それからソーマのことなんだが…あんまり悪く思わないでやってくれるか？」

「わかっていますよ、リンドウさん」

ハイドの返事にリンドウは首を傾げる。

「？わかってるってどういうことだ？」

「ソーマはそれほど悪い人間じゃないと…いえ、いい人間だと思っています」

ハイドは穏やかに答えた。

「ほぉ～…よければ理由を聞かせてもらえるか？」

リンドウはハイドに聞き返す。彼が「ソーマはいいやつだ」と言っ

た理由が気になったのだ。リンドウはソーマのことをハイドに弁解するつもりだったため余計に気になるのである。

「昨日のミッションが終わったあと、エリックの神機が入ったケースをソーマが持ち続けてたんです。回収班に渡せばいいのに…ヘリがフェンリルに着くまでの間、ずっとそうしてました」

「なるほどな…」

「それだけじゃありません…昨日の戦闘中のソーマの行動でも、彼の優しさを感じ取れました。」

「具体的にいうと？」

まだ理由があることに驚き、リンドウは興味津々だった。

「昨日の任務では、ソーマが先に行ってしまって僕はあとから合流して戦闘に参加したんですが…彼はオウガテイル二体の相手をしてました。その時、僕が戦闘に参加するのを見たソーマは、突然動きを変えたんです。彼は、常にオウガテイルの視界に入るよう動き続けてくれたんです…彼が作ってくれた隙のおかげで、僕はコクーンメイデンをほとんど背後に気を配ることなく攻撃出来ました。ソーマはきっと、他者が傷つくのを恐れている…ただの優しい人間なんだと思っています」

「…ははっ。どうやら…いい仲間に恵まれたようだなあいつは」

リンドウは、ここまでソーマを見ていたハイドに感謝の気持ちを感じていた。ソーマは第一印象の悪さとその後のことも全て含めて、ほとんど誰にも好かれていなかった。だが、感情表現がとことん下

手な彼を、これだけ見てくれる人間が現れた。

（ソーマのやつは…もう心配いらないな）

リンドウは立ち上がって、さっきまで吸っていたタバコを近くのテーブルにあった灰皿に捨てる。

「ま、引きずってないようで何よりだ。今後も頑張ってくれ、以上」

などと適当に終わらせるリンドウ。

「はい！ありがとうございます」

そんな彼にハイドは感謝の言葉を述べる。それを聞いたリンドウは背をむけ、手を背中越しにヒラヒラさせて立ち去った。

ハイドがエントランスに着くと、すでにコウタが待っていた。コウタはハイドを見つけるといつもの明るさで挨拶した。

「おっす！ハイド」

「おはようコウタ」

ここ何日か任務時間の違いで会っていなかったが、相変わらずのコウタの明るさにハイドは安堵する。

「お互いちゃんと生きてるみたいだね！命あってのこの商売だしね。…俺が死ぬと、母さんも妹も路頭に迷っちゃうから、気をつけなく

ちゃな～…」

昨日メールで自分を励ましてくれたコウタ。彼はエリックの一件から自分の気楽さを少しは見直そうとしているのだろうか。その言葉には人生経験の少ないハイドにもわかるほど感情がこもっていた。

「そうそう、サクヤさんって知ってる…よね？」

「？…ああ」

「あの人ってさ…なんかいいよね。美人だし感じいいし強いしさ…戦うお姉さんって感じでさぁ…たまんないよな～！！」

そういうことかと理解するハイド。確かにサクヤは誰が見ても美人の部類に入るだろう。おまけに銃型神機の制動力の高さは、極東支部でもずば抜けており、気さくな性格で打ち解けやすい。普通なら男は放っておかない存在だろう。

「あ、ああ」

「いよーぅしっ！なんっかテンション上がってきた～～！！今回の任務、どっちが多く倒すか勝負しようぜ！」

「は？」とハイドはコウタの言動にポカンとしている。

「サクヤさんにいいとこ見せてやるぜ～！！」

……やっぱりコウタはコウタだった。

相変わらず緊張感がない…もとい、明るい性格にハイドは思わず吹

き出した。

「な～に笑ってるんだよ～」

コウタはジト目でハイドを睨む。ぶーぶーと不機嫌そうな彼の口は、数字の三みたいな形になっていた。本当に表情豊かな少年である。

「今日の任務はコンゴウ一体だけだぜ？」

笑いながらハイドは的確にツッコミを入れる。

「んじゃあ『どっちが先に倒すか』の勝負だな！」

とコウタは返す。

「仮に俺がトドメをさしても『コウタがやった』って言っておくよ」

ハイドは勝負にこだわるコウタに大人っぽい対応をする。

「それじゃあ勝負の意味がないっての！」

やはり勝負にこだわるコウタ。まだまだ子供っぽい。

「わかったわかった！さっさと行くぞ…時間がもったいない」

「おう！」

あまりにしつこいのでついに折れたハイドは、コウタを連れて今日の任務地「鎮魂の廃寺」へと向かった。

鎮魂の廃寺…かつて神仏にすがる人々が静かに暮らしていたかくれ里であり、生活の中心にあった御堂はアラガミの襲撃によって半壊し、屋内には雪が降り積もっている。建物が多いため道が細く入り組んでいるこの場所は複数のアラガミを討伐するのには苦労すると言えるだろう。

「うぅ～…寒い…」

コウタは寒さでガタガタと震えていた。仕方のないことだ。コウタの服はかなり薄く、寒い場所での任務には向かない。

「大丈夫か？」

ハイドは上下長袖なので別に寒くはなかった。

「ほら、これでも着て体を温めろ」

そういってハイドが手渡したのは袖にファーのついたロングコートだった。予想をこえる寒さだった時のことを考えて、ハイドは前もって防寒用の私服を用意していた。それがどうやら役にたったようだ。

コウタは急いで袖を通しジッパーを閉めると防寒素材のおかげで体が温まるのを感じた。

「ふぅ～…助かった～…いよっし！もう大丈夫だ！」

コウタはハイドのコートのおかげで、再び明るさを取り戻した。

「そうか…じゃあまずは索敵についてだ。」

ハイドはコウタに弱冠呆れ笑いをして早速ブリーフィングを始める。

「まずは俺とコウタが二手に別れて索敵を始める。コンゴウは聴覚が鋭いから隠密行動で頼む。目標を発見次第、広域信号弾を使ってから交戦する。それでいいか？」

「ＯＫ！」

コウタは親指を立て、ケースから神機を取り出す。ハイドも肩に神機を担ぎ、準備する。

「…よし、行こうか」

二人は静かにそれぞれの方向へ進み出した。コウタは少しずつ、音を立てないように進み、やがて道の曲がり角に近づいた。壁に背を預け、ゆっくりと壁の向こうを見る。その視線の先にあるのは、白い雪に彩られた階段…。目標との接触はまだないようだ…。

「もう少し先の方を調べてみるか…」

コウタは少し先の方にある二つ目の階段を上って行き、また壁から様子を窺う。すると……。

（あいつだな……）

一体のコンゴウがあぐらをかいていた。

（…信号弾、信号弾っと……って！？しまった！！）

信号弾に火をつけたはいいが手からうっかり滑り落としてしまった。

そのまま信号弾は真横に進んでコンゴウの背中にぶつかった。

コンゴウが何事かと後ろを振り返ると無防備なコウタ。

「グアアアァァァ！！」

コウタ目掛けて突進するコンゴウ。

「やっべぇ！！！」

慌てて神機を構えるが間に合わない。だがコンゴウの牙がコウタに突き刺さろうとした次の瞬間…。

ヒュッと何かが横切り、コンゴウの口から「ガチンッ！」と牙の鳴る音が響いた。

コンゴウが辺りを見回すと、コウタを脇に担いだハイドが立っていた。

「大丈夫か！？コウタ！！」

ハイドの険しい表情に驚きながらもコウタは「ああ」と答える。

「そうか…じゃあこっちも反撃開始だ！！」

「了ぉ～解ぃっ！！」

そしてハイドは剣でコンゴウに斬り掛かり、コウタは後ろに回り込んで銃撃を浴びせる。

「！」

ハイドはコンゴウがとっさに丸太のような拳を振り上げたのを見て距離をとる。そのまま拳はハイドに向けて振り下ろされたが、それが届く前に背中に銃弾を受けてバランスを崩し、コンゴウが転倒する。

「今だハイド！！」

「もらったぁ！！」

ハイドはすぐさま神機でコンゴウを捕喰し、バーストした。

筋力が上がったハイドはコンゴウのとある箇所を重点的に攻撃する。やがてコンゴウが立ち上がると、うっとうしいとばかりに拳を振り回して自分と敵との距離を取ろうとする。

「おとなしくしやがれっ！」

そう言ってコウタが投げたのは対アラガミ用閃光手榴弾「スタングレネード」だ。眼前でそれは炸裂したため、コンゴウは目を押さえて少しの間うずくまる。

「コウタ！一気に崩すぞ！！」

ハイドのやろうとしてることを理解するコウタ。

「任せときなって！！」

ハイドはアラガミバレットをコウタに三発撃ち渡す。神機に命中し

たコウタ、リンクバーストＬＶ３を発動した。

「おっしゃぁぁぁ！！！」

ハイドはコンゴウに光速の連撃を浴びせ、コウタは背中に濃縮アラガミバレットを撃ち込む。

するとコンゴウの背中のパイプ状器官が破壊された。これがハイドが徹底的に痛め付けた場所である。これで真空波はまともに使えないはずだ。

すでにボロボロのコンゴウだが、それでもハイドに向かって右腕を振りかぶる。

だがコンゴウのパンチなど、バーストした今のハイドにはスロー再生のように見えた。必要最低限の動作でかわし、ハイドは懐に飛び込む。そして…。

「これで終わりだ！」

コンゴウの脇腹をハイドの剣が切り裂き、大量の血を吹き出した。コンゴウはついに倒れ、その生命活動を停止させた。

十二喰：コウタとの合同任務（後書き）

なんとなくですがコウタは戦場でなんかしらのヘマをやってしまう気がするんです。

……でめやっぱり憎めない、いいやつです。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』（前書き）

なぜなに講座第二弾です。最近コンスタントに投稿を続けていたので、週刊誌の漫画家の気持ちが少しずつわかってきました。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』

コンゴウの素材を回収したあと、ハイドとコウタは帰投する途中での会話に花を咲かせていた。

「いやぁ～今回も生き残れたねぇ～」

「そうだな。互いに大した怪我もなくてよかったよ」

ハイドは今日の任務の結果に満足していた。「コウタを死なせず、自分も死なない」。自らに課したその約束を今日は守ることが出来たのだ。文句は今のところない。

「それにしても俺達の相性すごくね？コンゴウのやつよろけまくってたしさ～」

コウタは意気揚々と話す。実際ほとんど反撃の隙も与えず勝利したし、ハイドもやりやすいと感じていた。

「俺達二人が組めば無敵だな！」とコウタは笑顔で話す。「あんまり調子に乗らないでくれよ？」とたしなめるハイド。二人を乗せたヘリはアナグラへと飛び立った。

「ミッション完了しました。確認をお願いします。」

ハイドはエントランスでヒバリにミッションの完遂報告を行う。もうこの作業にもすっかり慣れたものである。

「…はい、確認が取れました！では、報告書をどうぞ。……あ、ハイドさん、コウタさん！」

報告書を受け取りカウンターから離れて行く二人をヒバリが呼び止めた。

「榊博士が呼んでましたよ。ミッションが完了したら研究室に来てくれとのことです」

「あ、わかりました」

ハイドとコウタは何だろう?と榊の研究室へ向かった。

「やあ～よく来たね～。あ、ミッションお疲れ様。さあ、前の時のように自由に腰掛けてくれ」

ハイドとコウタは榊の研究室に入るなり、榊にマシンガンのように話されて少し戸惑った。やがて二人が腰を下ろすと、目の前にあるモニタに電源が入る。その画面に映しだされたのは…。

「ペイラーサカキのなぜなに講座」

やっと自分達は榊の講義に呼び出されたのだと理解する二人。榊は軽く咳ばらいすると講義を始めた。

「今日はこのフェンリルについて少し話をしようと思う。さて、突然だが君達は『アーコロジー』という言葉を聞いたことはあるかい

？」

『いえ…』

二人は聞いたことのない単語にクエスチョンマークを浮かべる。

「『アーコロジー』とは、それ単体で生産、消費活動が自己完結している建物を指す言葉なんだ。実はアナグラを中心とした世界各地のフェンリル支部も、一種のアーコロジーだと言えるんだ。これって極端な話、ある支部を除いた全てのフェンリル組織が滅んでも、残った支部は単独で生産、消費活動を行い、今まで通り生き残ることが可能ってことなんだよ」

と、榊は『アーコロジー』について説明する。ハイドは真剣に聞いていたがコウタはすでに眠そうだった。

「なるほど…このシステムなら、荒廃した世界でも生き残れるというわけですね？」

とハイドは話す。

「そうだ。アナグラは地下に向けて食糧や神機、各種物資の生産を行うプラントがあり、外周部には対アラガミ装甲壁や、君達優秀なゴッドイーターをはじめとした、高い防衛能力もある。それがフェンリル支部であり、人類を守るために最適化されたアーコロジーなんだよ」

ここまで説明した時点で、コウタの目は完全に閉じようとしていたが、次に榊が発した言葉に意識が戻る。

「ただそこにも問題はあってね。それは…収容可能な人口に限りがあることなんだ」

（！）

コウタの表情が一転して真面目なものに変わる。ハイドはこんなに真剣なコウタを見たことがなかった。

「君達も知っての通り、ここ『アナグラ』の周囲には、広大な外部居住区が形成されている。だが、彼ら全てを受け入れるだけの容量は、まだこの支部にも無い。対アラガミ装甲壁を張り巡らすことが、今できる最大限の防衛作なんだ」

「それだけで足りるのかな…現に装甲は頻繁に突破されてるんじゃ…」

コウタは対アラガミ装甲壁に対する不安を漏らす。

「だからそのために、ゴッドイーターによる防衛班も配備されている…いや、すまない。コウタ君のご家族は外部居住区にいるんだったね。軽率な物言いを許してくれ」

榊はコウタに先程の発言を詫びる。

「いや…俺はただ…」

「本当はアナグラを地下に向けて拡大して、内部居住区を増やす計画もあったんだけどね…」

「でも、その計画をより安全で完璧にしたのが『エイジス計画』な

んだよね！」

コウタは明るく振る舞って言った。

（かなりエイジス計画を信頼しているな…確かに、家族を助けたいコウタにとってこの計画は頼みの綱だけど…）

ハイドは、その期待を裏切られた時のコウタを心配した。過剰な期待はその分反動も大きいのだ。もし『エイジス計画』が水泡に帰したとき、コウタは堪えられるだろうか…。

「…そうだね。現状極東支部の地下プラントの多くの資源リソースは、『エイジス計画』に割り当てられている。…その話は、また今度にしようか。今日の講義はここまで」

榊が講義の終了を告げ、二人は部屋を出て行った。

「ヨハン…君はいったい何人の期待を裏切るつもりだい？」

榊は旧友を頭に思い浮かべ、つぶやいた。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』（後書き）

ちょっと短くなってしまいました。最近程よい長さの話作りに悩んでいます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9966x/

神を喰らう者～夜明けの開花～

2011年11月6日04時06分発行